生きがいを持って過ごせる持続可能な島に

合同会社和楽代表
澁谷 聡

昭和46年生まれ。平成21年飛島にIターンし訪問介護事業所「合同会社和楽」を開業。デイサービスやショートステイサービスの提供など高齢者福祉の向上に貢献。出荷できない魚介類を活用し要介護者でも作業可能な加工商品づくりに挑戦するほか、し尿汲み取りやごみ回収を行なうなど島の生活環境づくりにも尽力。中村地区自治会長も務める。

私は一五年前の平成二一年に訪問介護事業所「合同会社和楽」を立ち上げ、家族五人で飛島に移り住みました。休校していた学校も再開し、島生活がスタート。これまでの飛島には移住者はほとんどなく、私たちの移住をきっかけに若者や子どもが増え、新しい産業で雇用を生み出すことが目標でした。現在も事業を継続できているのは、デイサービスを楽しみにしてくれている利用者の皆様のおかげです。

振り返れば、島ならではの介護の形を模索し、廃棄されている魚を使った製品を開発し、介護サービス利用者などが働いて収入が得られる場所づくりを目指したこともあります。しかし、その魚自体がまったく獲れなくなるなど、なかなか思うようにはいきませんでした。ただ、私たちの取り組みに生き生きと参加してくださったお年寄りの方々の表情が、今も目に焼きついています。障害者自立支援法の基本理念のように、要介護認定を受けても収入を得ながら社会参加ができる形が理想と感じており、施策制度の充実を期待しています。

飛島の人口は一六〇人を切りました。島の未来を考えると、キーワードは「子どもと教育」だと思います。リモートでの授業や通信制のN高校など、教育の形は変化しており、これまで以上にいろいろな選択が可能になっています。私たち夫婦は、介護と並行して里親の研修を受けました。飛島が不登校や引きこもりの子どもたちの居場所になればと考えています。島の自然や風土は、人を癒すパワーに満ちています。短期・長期を問わずに子どもを受け入れる体制を整備し、お年寄りも生きがいを持って過ごせる次のステージの飛島を目指し、次世代にこの島をつないでいきたいです。また、日本の島々に暮らす方々が末永く島で生活し続けていけることを願っています。■

特集 離島振興功労者表彰―東京都八丈町八丈島

お年寄りにもやさしい インターネットの利用環境を

元・株式会社あさぬま商店代表取締役／八丈町商工会顧問
浅沼 孝彦

昭和20年生まれ。同42年より家業の浅沼商店に従事、平成5年に継承。同10年有限会社あさぬま商店（現・株式会社）設立。島内の雇用を創出するとともに商工業の活性化と観光業を推進。商店経営と併行して八丈町商工会役員を長く務め、平成13年会長就任。専門家派遣相談や金融相談会開催など小規模事業者の支援に尽力。同30年顧問就任、現在に至る。

八丈町は、三原山を中心とする樫立・中之郷・末吉の坂上三地区と、中心地である大賀郷・三根の坂下二地区から成っています。私は、末吉地区に生まれ、家業の小売店を受け継ぎました。

町の人口が一番多かったのは昭和二五年で、一万三三五九名（末吉は約一三〇〇名）でした。しかし、高度経済成長期の若年層の流出、少子高齢化などが進み令和五年一一月時点では六九八三名となっています。末吉地区も人口が減少し、明治五年に建てられた末吉小学校は平成二五年に閉校。中学校や保育園も無くなりました。現在の地区人口は二三三名ほどで、かつて五店舗あった商店は一店舗となっています。

いまや過疎対策は日本全体の課題であり、市町村では国や都道府県、民間などと協力しながら新しい地域づくりに取り組んでいます。なかでもインターネット環境は医療や空き家問題、交通インフラの維持などの解決に必要不可欠です。八丈島では、二〇年ほど前にソフトバンクの孫正義さんが来られ、ヤフーBB（ブロードバンド）やIP電話サービスが始まり、都市と変わらないインターネット環境が整いました。

全国の光ファイバ整備率は九九・三パーセント（世帯カバー率、令和三年三月）ですが、住民の利用は追いついていないようです。現在、町では配車に人工知能を活用する「AIデマンドタクシー」や、電動バイクなどを共同利用する「シェアリングモビリティ」の実証事業を行なっています。高齢化社会に対応する取り組みの一環ですが、利用者のほとんどは観光客。お年寄りなどスマホの取り扱いも分からない方が多いなか、これらの行政施策についていけない人が多数います。誰しもが利用しやすいインターネット環境づくりに向け、私も寄与していきたいと思います。■

離島で精密部品製造に挑戦 人材育成など島内経済を牽引

佐渡精密株式会社取締役会長
末武（すえたけ） 勉（つとむ）

昭和16年生まれ。同45年に光学機器の精密部品製造会社として佐渡精密株式会社を創業、代表取締役専務、同社長、同会長などを歴任、平成29年より現職。100名規模の島内雇用を創出しUIターンの受け皿となるなど、佐渡の市内経済を牽引。中小企業研究センター「グッドカンパニー大賞特別賞」、経済産業省「地域未来牽引企業」選定ほか表彰多数。

私たちの会社の創業は昭和四五年二月です。離島で精密な部品を作ること自体、一般的には考えられないことで、船はちゃんと就航するのかなどと心配され、取引先の開拓もなかなか進まない状況から始まりました。もうすぐ創業五四年になりますが、この間、ドル危機やオイル・ショックなど、いろいろなことがありました。

私たちが生き残ることができている理由の一つは、多種少量で良い製品をつくり続けているからです。ＩＳＯ９００１・同１４００１をいち早く取得したほか、航空宇宙品質規格のＪＩＳＱ９１００も認証取得しています。製品も光学機器から内視鏡などの医療、航空・宇宙分野まで扱っており、現在では全国に八〇〇社を超える取引先があります。

もう一つは、全員参加型の経営です。昇給や賞与、年間休日を私が決めるのではなく、従業員たちが相談して決め、売上の四パーセント以上の利益なら、翌月から実施に移すことを原則としています。また、トヨタ生産方式に似たＳＰＳ（佐渡精密）方式というものもあります。例えば、一つの部品をつくる時間を一〇秒から八秒に短縮する工夫を考え、実現した社員には特別表彰と賞金を全従業員の前で贈る仕組みです。

ありがたいことに最近では、大卒の若い人も増えています。ＵＩターン者も多く、社員全体の七割ほどを占めます。佐渡には工学系の学校はありません。入社した社員には、職業訓練の機関に通って工学を勉強する機会をつくっています。また、新潟大学の先生方にお願いして、自社だけでなく佐渡全体の若手人材の育成のために、「佐渡産業創造塾」や「ものづくり大学」を開設してきました。

佐渡は離島ですが、ハンデは工夫次第で克服できる。今後も若手を育てながら、地域振興に邁進していきます。（談）

特集 離島振興功労者表彰 ― 新潟県佐渡市佐渡島

ロケット部品の製造や六次産業化 若者が楽しく働ける島づくりを

セイデンテクノ株式会社代表取締役会長
キンちゃん本舗株式会社代表取締役社長
柴原（しばはら） 行雄（ゆきお）

昭和47年株式会社精電舎佐渡工場入社、同工場長、代表取締役社長、同社本社取締役、同社長、セイデンテクノ社長などを歴任し佐渡の製造業の発展に尽力。併せて、第一次産業の六次産業化を図るキンちゃん本舗株式会社の代表取締役社長を務めるなど、地域資源を活用した島の活性化に貢献。佐渡工業会の一員として、企業間連携の強化にも取り組む。

昭和四八年の第一次オイル・ショック時に止めた精電舎佐渡工場を、私が回収するような形で始めたのがセイデンテクノの端緒です。相当な借金があり、返済には非常に苦労しました。六年間は、営業に出ても宿に泊まることはないほどで、当時あった二四時間営業の映画館で夜を明かしたこともあります。また、佐渡は離島なので、期日までに納品するために、本土側に営業所や倉庫を持たなければならなくなった時もとても困りました。苦労も多くありましたが、国内にないものを開発しようと専門家と一緒に研究して、国産ロケットの部品を完成させた時は本当に嬉しかったです。

じつは、田中角栄先生から「柴原君は果物とか野菜づくりが好きだから、そういうものに対応できる力を発揮して。よろしく頼むよ」との電話をいただいたことがあります。先生が亡くなる七カ月前のことです。その時の言葉を「農業を事業化しろ！」という意味だと私なりに解釈し、それまでやってきた仕事と違った六次産業化に取り組み始めました。

新潟県の中でも佐渡は米どころとして知られています。そこで若者が五、六人集まって米づくりを事業化できる環境を整備しました。現在、七軒の米づくり農家から私が米を買い取り、米粉にして市場に出しています。三年ほど前からは、リンゴの生産とジュースの製造も進めています。これらの取り組みを始めて七年になりますが、やっと実ってきた感じです。いまでは、農業をやりたい、と佐渡に来た人が四百人ちかくにまで増えています。

とにかく、若者が楽しく働くことができないと、佐渡はますます過疎になってしまいます。佐渡はもともと勤勉の地です。これからも志をもって、次世代の人が働ける環境づくりを進めたいと思います。

（談）

「高齢者二十歳（はたち）」まで活躍できる島生活

一般社団法人アフタースクール代表理事
髙柳（たかやなぎ） 一巳（かずみ）

平成11年、不登校などの児童・生徒に居場所を提供するため「一般社団法人アフタースクール」を設立。同27年より代表理事。併行して、義務教育を終えた若者の支援に向け広域通信制高等学校の学習センターを誘致するなど、佐渡の子どもたちや保護者のサポート、学校と社会の橋渡しに尽力。令和5年児童相談所の養育里親登録。

アフタースクールを始めて二二年。五人（うち二人は娘と息子）からスタートし、今まで関わった児童・生徒は三百人以上。家族、地域、行政の協力のもと、これまで一人でやってきました。学童保育（宿題・おやつ・外遊び）、学習塾（月～土曜の毎晩）、通信制高校、不登校・ひきこもり支援や就労支援など、活動範囲も広がり困難も増してきています。この間、一年半ほど押し入れ生活をしていた生徒が今では一児の母になったりと、本当にさまざまな出会いがありました。苦労はあるものの、島の生活は「楽しい」の一言につきます。

島にいてもできる事はたくさんあります。その一つが大学卒業資格の取得です。通信制大学を活用すれば島内で取得でき、現在、六名の（スクールの）卒業生が放送大学で勉強中です。通信制は前向きに検討すべき分野で、一八歳人口の島外流出に歯止めをかけるだけでなく、島の将来を明るくする可能性を秘めていると思います。

卒業生から学ぶことも多くあります。次年度から農業を中心に活動し、将来は農家を目指す現在放送大学三年の卒業生。新潟の大学に通いながら、ほぼ毎週末に佐渡で子ども活動を行ない、二年続けて「バンブーフェスティバル」を開催してくれた卒業生など、彼らからは、生徒一人ひとりの興味関心を共有し、関わりを維持することの大切さ、人材育成の基本を教えられました。

「学びと行動」を継続できる人材を育成できれば、島の未来は明るい。それは高齢者も同じです。現在、六六歳。まだ高齢者二年生の私には、やりたい・やれる事がたくさんあります。昨年はタケノコの水煮を高校生や卒業生と販売しました。卒業生や地域の方々とチームを組み、佐渡に必要な社会資源づくりから再スタート。高齢者二十歳まで頑張ります。■

特集 離島振興功労者表彰 ― 愛知県南知多町日間賀島

交通安全の活動の実践と地域スポーツの活性化に尽力

安楽寺住職
高橋（たかはし） 公雄（きみお）

昭和32年生まれ。同58年日間賀島安楽寺の副住職に就任、平成20年より現職。住職を務める傍ら日間賀島交通安全副会長、南知多町体育指導委員会委員長、愛知県スポーツ推進委員連絡協議会常任理事を歴任。交通安全とスポーツ振興を通じ、日間賀島のみならず町全体の地域振興に貢献。文部科学大臣スポーツ推進委員功労者表彰ほか受賞多数。

昭和五八年に南知多町日間賀島（ひまかじま）の「地区体育指導委員」、翌五九年には「日間賀島交通安全会」の委員の任を受け、約四〇年にわたる活動が始まりました。平成に入り、交通安全会では副会長を務め、同九年からは現在に至るまで半田交通安全協会南知多支部会員の一員として活動しています。

交通安全会は島独自の組織です。主な仕事は島内の道路脇の除草作業で、夏期には月に二度ほど作業があり大変です。潮風で汚れたカーブミラーの清掃や老朽化したミラーの取り替え、祭事の際の交通整理なども行なっています。島の外周道路の完成後には、交差点への信号機の誘致活動、交通安全啓発の決起大会の開催なども実施しました。平成九年からは後人に役を譲り、町交通安全推進委員の任を受け、通学時の児童の保護誘導や街頭立哨活動を現在まで続けております。

スポーツにおいては、地区の体育指導委員に始まり、平成四年から町スポーツ推進委員として三十年余活動してきました。町の活動は他地区の委員と協力して取り組んでいくのですが、就任当初の島内には個々のクラブの活動があるだけ。そこでスポーツクラブをまとめる協会組織を何度も協議を重ねて立ち上げました。

協会は、主に地区からの助成金の確認、体育施設の利用のとりまとめなどを行なっています。また、ニュースポーツの普及、町大会への参加要請から引率までを地区の推進委員とともに担っています。

どの役職も、よい活動環境を残していただいた先人の努力と、助け合いながら取り組んできたすばらしい仲間がいたおかげで、務めを果たすことができました。今後は、活動を受け継ぐ後任を育てることが自らに課された使命だととらえ、日間賀島の振興に取り組みたいと考えております。■

島づくりは人づくり 全国の島々を訪れて

鳥羽磯部漁業協同組合常務理事／第八代全国離島振興推進員連絡委員会会長
藤原（ふじわら） 隆仁（たかひと）

昭和48年より神島で漁業に従事。平成4年神島漁業協同組合専務理事、組合長を経て、同16年に鳥羽磯部漁業協同組合常務理事に就任。黒海苔委託加工施設や製氷冷凍冷蔵施設の整備、「トロさわら」のブランド化など離島漁業者の生活向上に尽力。全国離島振興推進員連絡委員会第8代会長を務めるなど全国の離島振興への貢献も大きい。

このたび国土交通大臣表彰の栄に浴したことは、身に余る光栄と感謝申し上げます。高校卒業と同時に地元の神島で漁業に従事し、三六歳の時に神島漁業協同組合の専務理事に就任して以来、今日まで三二年間にわたり漁協役員として漁業に関わってきました。その傍ら、平成一六年から全国離島振興推進員連絡委員会（全推連）の役員を務め、これまでに六〇を超える全国の島々を訪れました。各地の先輩方からご指導をいただき、多くの友人に恵まれたことが私の財産です。この経験が漁協運営や島づくりのヒントとなっています。

平成二三年秋の全推連総会・理事会で同会長に就任、その後の交流・視察研修で宮城の気仙沼大島を訪れました。TVなどで見ていた震災の惨状と、現地の空気感の違いに驚きました。私たちの地域でも東南海地震の危険度が増している中、この惨状を多くの島人に知ってもらいたいと、その翌年に友人である塩竈市桂島（かつらじま）の内海春雄さんを講師として鳥羽市と志摩市の島にお招きし、震災体験を語っていただきました。

人口減少と少子高齢化は、訪れたどの島でも共通する課題でした。特に医療、介護問題については、交流・視察研修の際の意見交換会などの機会を利用し、各地域での新しい取り組みについての知見を得たり、情報共有をしています。

近年の交流・視察研修では、移住者も含め若者を中心に、島だからできる私たちでは発想できない新しいビジネスを展開したり、島人と同じように島を愛する方々が独自の視点で島おこしに尽力している事例を目の当たりにするようになり、離島振興も時代とともに変化してきたことを実感しています。自助、共助が公助につながり、「島が良くなろうとするときに法が生きる」という言葉を胸に、私も邁進していきたいと思います。■

特集 離島振興功労者表彰 ― 滋賀県近江八幡市沖島

誰もが「もんてきたくなる」島づくりを目指して

沖島町離島振興推進協議会

平成25年7月の沖島の離島振興対策実施地域の指定を受け、自治会やまちづくり協議会、沖島漁業協同組合、消防団などの主要関係団体が結集し、同年10月に設立。以来、島言葉で“帰ってくる”を意味する「もんて」をキーワードに、関係人口の創出・拡大を目指した取り組みを実践、来島者数が倍増するなど沖島の振興に貢献。

島国の日本に数多ある有人離島の中にあって、琵琶湖という淡水湖にある沖島はやや特殊かもしれません。しかし、人口減少や少子高齢化、基幹産業の漁業の担い手不足など抱える課題は他の島と変わりありません。

沖島町離島振興推進協議会は、平成二五年に沖島が離島振興対策実施地域に指定されたことを契機に、島の未来に向けた振興を目的として、自治会や漁業協同組合など島内のさまざまな組織が結集して設立されました。

対策実施地域の指定を受けた当初、住民の間では「行政主導で建物が建つ」「道路が整備される」などの期待が膨らみました。また、島の中には「静かに暮らしたい」と願う方もおり、自らの手で沖島の未来をつくっていくという考えの浸透は一朝一夕には成しえませんでした。しかし、多くの若者が島を離れ、このままでは地域の祭りや伝統文化も途絶えてしまうことは目に見えています。子や孫が帰れる場所や関われる機会を残したい、という想いが徐々に広がり、自分たちが沖島を守るんだという気持ちが強くなったように感じます。

これまでの協議会の取り組みには、沖島ファンクラブ「もんて」の設立、島の郷土飯「もんてくって」の開発、遊覧船「もんてクルーズ」の運航などがありますが、すべてに「もんて」という言葉を用いています。島の言葉で帰ってくることを「もんてきた」と言いますが、観光客にもふるさとに帰るような気持ちで来てほしいという想いや、島外へ出た子や孫に、いつでも帰ってこいよという願いを込めています。

現在、沖島には学生を中心に、一緒になって島を盛り上げようとしてくれる若者が増えています。これからも、さまざまな方の手を借りながら、協議会として誰もが「もんてきたくなる」島づくりに尽力していきたいと思います。■

運命のことば「海がいいか？ 山がいいか？」

医師／隠岐広域連合立隠岐島前病院参与 白石吉彦

平成4年自治医科大学卒。徳島で山間地のへき地医療を経験後、同10年に島根県・隠岐諸島の島前診療所（現隠岐島前病院）に赴任、13年院長、令和3年隠岐島前病院参与、島根大学医学部付属病院総合診療医センター長に就任。平成26年第2回日本医師会赤ひげ大賞ほか受賞多数。著書に『離島発 とって隠岐の エコーで変わる外来診療』（中山書店）など。

平成一〇年に島根へ来る際に、問われた質問である。徳島の山で地域医療を実践した後だったので、そう深く考えず「海でお願いします」と返答。「つらいけど一年頑張ってきてくれ」と、送り出された。

島根に来てみると、後鳥羽上皇や後醍醐天皇をはじめ悠久の歴史を感じつつ、大自然に囲まれての隠岐の生活は、想像を絶する楽しさだった。地域のおばさま方が子育てを大いに助けてくれたため、医師としての仕事も全然つらくなく、むしろ総合診療医を強く志していた自分にとっては、すべての初療患者が訪れる医療のセッティングはとても魅力的であった。非常勤診療として耳鼻科・眼科・産婦人科・精神科・整形外科があるため、フル装備の外来の診療セットを使いこなせるようにもなった。隠岐があまりにも楽しく、赴任一年目の冬にヨットを買ってしまったほどだ。人生の中で離島に住み、船のオーナーになるとはまったく想像していなかった。

その後、一年また一年と勤務を延長し、四年目の三四歳の時に院長を命ぜられた。そこから二〇年にわたり離島の小病院の院長として、仲間づくりや仕組みづくりを行ないながら、離島医療の魅力、やりがいを発信し続けてきた。実際に来島し、短期間でも住んでみなければ島の魅力は伝わらない。現在、病院全体で年間百名余の医療者の見学を受け入れている。

離島という最先端の人口構成、リソースの限られた場所で暮らすことで、日本全体の現状や向かう方向がよく見える。本当に豊かな人生とは何かを考え、実践することもできる。令和三年より、軸足は隠岐に残したまま、島根大学医学部付属病院の総合診療医センター長として週二日、授業や県全体を見据えての総合診療医育成の仕事を行なっている。この魅力的なへき地医療を若い医学生に伝えていきたい。 ■

特集 離島振興功労者表彰 ― 島根県隠岐の島町島後

食生活の改善による健康長寿の島づくりを目指して

隠岐の島町食生活改善推進協議会会長
松田照美

県立隠岐高校卒業後、平成10年西郷町食生活改善推進員に。同町食生活改善推進協議会副会長、会長を歴任後、同17年より隠岐の島町食生活改善推進協議会の初代会長に就任、現在に至る。行政や各関係機関と連携しながら、町の食生活の課題解決に取り組み、住民の健康増進、食育推進に貢献。栄養関係功労者厚生労働大臣表彰ほか受賞多数。

国土交通大臣表彰の栄に浴したことは、身に余る光栄です。

私が活動している「隠岐の島町食生活改善推進協議会（以下、食改）」は、島後四町村（西郷・布施・五箇・都万）が合併し、隠岐の島町が誕生した直後の平成一七年に発足しました。

隠岐の島町は生活習慣病の方が多く、食改は「私たちの健康は私たちの手で」をスローガンに、健康長寿の島を目指してさまざまな活動を行なっています。最初は轍のない道でしたが、食改の推進員が互いを想い合い「できる人ができる時にできる事を」を合言葉に取り組んできた結果、現在では少しずつ轍ができ始めています。

私たちのおもな取り組みとしては、家庭訪問による塩分測定を実施し、減塩と野菜摂取量の向上を図るための啓発普及活動、地域のイベントや各種教室などの開催による食生活の改善活動などがあげられます。

世代別では、幼児・小学生には「ふれあい食体験事業」「親子クッキング教室」などを通じた、自然に親しみ育む心づくりや眠育、朝食の欠食を減らすことによる元気な体づくりの推進。中学・高校生には「郷土食料理教室」の実習などを通じた郷土食の伝承（故郷を愛する心の育成）と、身体をつくる大切な時期におけるバランスのとれた食生活の習慣化を伝えています。高齢者世代には、栄養・運動・社会参加の充実により、豊かで健康的な時間を過ごせるように気を配っています。

「元気で長生き隠岐の島町」の実現に向け、私たちが食を通して幅広い年代に関わることができているのは、食改を支援してくださる行政の皆様のご協力の賜物です。今回の表彰は、私の会長就任以来、支え続けてくれている推進員の方々とともに受賞したものです。今後も「食改の輪」をより一層拡げていくよう頑張ってまいります。■

貴重な伝統文化を娯楽として楽しみ、後世に残す

全隠岐牛突き連合会

昭和48年、牛突き関係団体の統括と牛突き大会などの円滑な運営を目的に結成。現在は、突き牛購入費の補助をはじめ牛突きに参加しやすい環境の整備など、担い手の確保や後継者の育成に取り組んでいる。また、観光客へ牛突きを披露する「観光牛突き」への協力など、牛突き文化の広報にも尽力している。

隠岐諸島には四つの有人島があり、古くより闘牛（牛突き）を行なう文化がありました。いわれでは、承久三（一二二一）年に後鳥羽上皇が隠岐へ配流された折に、上皇を楽しませようと、島人が御前で牛を突かせて見せたことが始まりとされています。現在は有人四島のうち島後（隠岐の島町）でのみ牛突きが行なわれており、町の伝統的娯楽として住民に愛されています。昭和五三年には、国の選択無形民俗文化財に指定されました。

隠岐の島町は、離島という環境からか祭り事が盛んで、その中で催される神事を娯楽として楽しむという風土が根づいています。神社の遷宮や町内の慶事にあわせて開催される徹夜相撲（古典相撲）、人馬が一体となって神社の参道を駆け上がる馬入れ神事のほか、牛突き本場所大会も神社の祭礼での奉納行事として行なわれ、これらは町内の主要な行事として、住民生活の楽しみとなっています。子どもたちは、行事に携さわる大人たちの姿をみて、いずれは自分たちも参加するんだ、という気持ちを抱きながら成長していきます。

全国どの地域とも同様に、少子化や人口減少による次世代の担い手不足が、伝統文化継承の大きな課題だと思います。隠岐の牛突きについては、町から突き牛導入のための補助金や共同牛舎設置などの支援があり、若者の参入が増えましたが、担い手不足の解消にはいたっておらず、飼料費の高騰など数多くの課題もあり、まだまだ世代交代には遠い状況です。

しかしながら、牛突きを好きといってくれる子どもたちや、牛突きをやるために隠岐に残ってくれた若者たちとともに、まずはこの貴重な文化を娯楽として大いに楽しみ、世代間交流や闘牛が残る他地域との交流などを通して輪を広げながら、関係者で一丸となって牛突き文化を継承していきます。■

特集 離島振興功労者表彰 ― 岡山県笠岡市真鍋島

新鮮な魚を皆様に 食を通じて島と人を結んだ四〇年

漁師料理「漁火（りょうか）」店主 山下（やました） 増石（ますし）

昭和7年生まれ。同30年より家業のきんちゃく網でのカタクチイワシ漁に従事。同61年に自作の漁師小屋で料理店「漁火」を開業。以来、40年にわたり魚本来の味を楽しめる漁師料理を提供し続け現在に至る。日本全国はもちろん海外からも来店者を集めるなど、食を通じた真鍋島の関係人口の創出・拡大に大きく寄与。

この度は、離島振興功労者として名誉ある表彰をいただき大変感謝しております。令和六年一月で九二歳と、自分でもびっくりする程、歳を重ねてまいりました。この年齢になっても仕事を続けられていることに感謝しております。

私は、真鍋島が大好きです。目の前に広がる海も大好きで、毎年夏に海に飛び込みをすることが私の恒例行事となっています。子どもの頃、船上で獲りたての魚を食べていた記憶があり、漁師の道を選んだのは自然の流れだと思います。昔は、漁師も漁船もたくさんあって、魚も豊富でした。

五〇歳を過ぎた頃、美味しい新鮮な魚を皆様に食べていただきたいという思いと、若い漁師からのリクエストもあり、漁師料理のお店を始めることにしました。店内のカウンターとなる船、入り口の生簀、調理場など素人ながら手づくりで仕上げて誕生したのが、漁師料理「漁火」です。

カウンターの船に海老を泳がせてつかみ取りができるように工夫したほか、お風呂に入りながら料理を食べられるようにしたこともあります。テレビのクイズ番組や新聞・雑誌などさまざまなメディアにとりあげていただき、近県のみならず、全国からお客様が足を運んでくださるようになりました。口コミなのか、ハワイなど海外からのお客様も来られて、驚くばかりです。食を通じて人間関係も深まり、毎年のようにお越しになる方や、島に住みたいというお客様もいます。遠方から真鍋島のイチ料理店にご来店いただき、感謝の念しかありません。

近年、島の住人は少なくなっています。漁師も魚も減少しており、大変苦労しています。漁師の皆さんの助けを借りながら店を続けていますが、今後が心配なのが本音です。

欲張らず、前向きに頑張りたいと思っています。■

地域に活力をもたらす島外とのつながり

相島（あいじま）いも生産部会長
坂倉（さかくら） 政之（まさゆき）

昭和20年生まれ。スイカ栽培・イモ栽培に従事。山口県離島青年推進員連絡協議会会長、萩諸島連絡協議会会長などを歴任。平成25年12月より萩市民生委員児童委員、同28年12月より同委員会理事の地域福祉部会長として活動。全国離島振興推進員連絡委員会副会長をはじめ昭和45年～平成15年の33年間にわたり同会役員を務めた。

私の住む相島は、萩市沖合の日本海に位置し、大半の家庭が半農半漁の生活を営んでいます。島では、スイカやサツマイモの栽培が盛んで、私も農業振興に努めてきました。とくに、相島いも生産部会長として、島で栽培しているコガネセンガン（黄金千貫）を原料とする「はぎいも焼酎あいしま」の開発に携わり、ご当地焼酎として広く知られるようになりました。また、これら特産品を活用した「スイカオーナー制度」「いも掘りフェスタ」などにも取り組み、これまでは縁がなかった島外の方々にも相島とのつながりを持っていただくことができました。

平成一四年に萩市有人四島（相島・大島・見島・櫃島（ひつしま））の島おこし団体を母体とする「萩諸島連絡協議会」を設立しました。少子高齢化が急速に進展する中、他の島々とのつながりを大切にし、情報交換や交流をすることで、地域に活力がもたらされると考えたからです。この会で「萩ふるさとまつり」や「アイランダー」への出展も経験しました。県内では、同会の設立以前から、全国的に珍しい独自の「山口県離島青年会議」が開催されており、毎年百人近くの離島青年が集う貴重な交流の場となっています。この会議を主催する山口県離島青年推進員連絡協議会は、私が初代会長を務め、令和五年には設立から半世紀を迎えました。

私たちが相島で生活できるのは、先人たちの礎（いしずえ）があったからです。気象条件はもちろん、長い年月をかけて築かれた石垣、粘土質で保水力の高い土壌でありながら抜群の排水性という好環境で、ここで育まれるスイカをはじめとする農産物は高い評価をいただいています。「島だから難しい」ではなく、「島だからできること」を求めて、チャレンジを続けたいと思います。

（談）

特集 離島振興功労者表彰 ― 愛媛県上島町岩城島

故郷に帰ってきたへき地診療医の回想録

医師／医療法人岩城診療所理事長
福井 康太郎

昭和20年生まれ。熊本大学医学部付属病院放射線科文部教官助手、同講師、熊本労災病院放射線科部長を歴任後、同64年1月岩城村へき地診療所長就任。平成5年岩城診療所開設、同7年5月医療法人岩城診療所開設、理事長に就任し現在に至る。住民が安心して地元で診療を受けることができる「よりよい地域医療」の実現に尽力。

昭和六三年秋、私が熊本労災病院に放射線科部長として勤務していた頃、わが故郷の岩城村が無医村の危機に瀕しているとは夢にも思っていなかった。この年、島では村を二分する村長選の末、新たな村長が誕生していた。その煽りで、当時の診療所の勤務医が辞意を表明、新村長は医師捜しに奔走したが実らず、最後に白羽の矢が立ったのがこの私だった。

私は、放射線専門医の肩書きを捨て、未知なる地域医療に進む勇気も自信もなかった。丁重にお断りしたが、村長は二度・三度と来熊し、村民の想いを語り、当時存命だった私の父親の心情を持ち出して懇願。結果、私の方が折れたのである。帰島までの二カ月間は、同病院各科を回り地域医療に関する必要最小限の勉強をした。そして昭和六四年一月、やがて平成となるこの年にへき地医療への一歩を踏み出した。

ベテラン看護師二人、村の事情に精通した事務員一人、スタッフに不足はなかった。この年、暖かくなるにつれて患者が急増。大半は腰痛、膝痛などの整形外科領域の患者で、このほか内科・外科・小児科・眼科・耳鼻科・皮膚科など。まさによろず診療所で、犬や猫の臨終に立ち会うこともあった。

へき地医療に携わる医者はいつ・どこで・どんな患者でも一人で診なくてはならない。スーパーマンのように大変だと感じるかもしれないが、慣れとは恐ろしく一年・二年と経験すると当たり前のようになるものである。

今回の表彰は、住民を代表して受賞したものである一方、今しばらく故郷に尽しなさいという私に対する叱咤激励だともとらえている。少子高齢化、過疎化、コロナ禍の影響を受け、診察室は閑散としている。この中で若くして有能、さらにメスを握れる内科医がこの地に根づいてくれることを夢見ながら、診療に勤しむこの頃である。 ■

いつも想うは十年先 みんなついておいで

神集島区長／佐賀県離島振興委員会委員
髙﨑 正幸

昭和27年生まれ。平成15年神集島区長及び佐賀県離島振興委員会委員に就任、現在に至る。神集島自治会が運営する神集島購買部を活動拠点に、食料品などの生活必需品の販売や、島の住民同士の交流の促進に寄与。急患の対応や付き添い、万葉の歌を活かした観光振興、空き家改修や移住希望者とのマッチング支援など幅広い分野で活躍中。

平成一五年、神集島区長、自治会長をはじめ諸々の役職を一手に受けた時、人口は六八七名、既に少子高齢化が始まっていた。毎日起こる問題の対応にただガムシャラに走り続けた。今では「困った時の区長さん」と、島の方々からのニックネームをいただいている。そんな折の国土交通大臣表彰、身に余る光栄に感謝しております。

それにしても、一一月一日の式典出席の東京行きは大変でした。島内唯一の商店の帳簿に支払い計上はもちろん、一〇月二九日は寺の総代長として檀家の年忌法要のため、精進料理を作って寺で準備。その最中に水道管が破裂したとの電話を受け、現場へ急行し修理。翌三〇日は、猟友会有害鳥獣駆除員として、箱わなにかかったオスの猪をジビエ料理に解体処理。さらに三一日は、朝七時四〇分に新聞配達員が店に駆け込んで来て「〇〇さんが家の中で倒れている！」との知らせ。急いで現場へ向かい、これはいかんと判断してすぐに担架の手配、海上タクシーへのスタンバイも指示した。一一九番中に定期船が着き、診療所の先生が来られたので、本土の病院へ連絡を入れていただいた。社会福祉協議会の会長でもある私は、救急車の同乗を協議会委員に依頼し、患者と一緒に本土へ。救急隊員に引き継いだ後、店に折り返して、その日の最終便にて本土へ渡り一泊。翌一日朝一番で電車、飛行機を乗り継ぎ東京へたどり着いた。久方ぶりの笑顔の面々に会えた式典会場をあとにホテルへ戻ると、着信総数二八件一七名――。溜息が出たが、それでも神集島が好きだ。

現在の島の人口は二五〇名。何とかせんと仕事を作ろうと思い、令和五年七月に「かしわ産業株式会社」を立ち上げ、エミューという鳥を中心に事業を始めた。

さあ頑張ろう、みんなついておいで。■

特集 離島振興功労者表彰 ― 長崎県長崎市池島

池島とともに歩んだ一五年の医師生活

医師／長崎市池島（いけしま）診療所
村川（むらかわ） 敏春（としはる）

昭和14年生まれ。同47年三重村三重診療所（長崎市三重診療所）赴任、長崎市北保健センター、長崎市中央保健センター勤務を経て、平成20年より池島診療所へ、現在に至る。通常の医療に加え、学校医や産業医として企業などの職員健康診断を行なうなど、看護師とともに池島住民の健康保持、さらなる地域医療の確保・充実に尽力。

このたびは身に余る賞を賜り、恐縮しております。顧みますと、朝七時ごろに自宅を出て、神浦港（こうのうら）から船に乗り、一五分ほどで池島に到着。八時前には池島診療所に着きます。平成一四年四月に開設された同所の診療時間は、午前は九時から一一時まで、午後が一時から四時まで。現在（令和五年度）、島には子どもが三人（中学生一人、小学生二人）いますが、診療に見えるのは七〇歳以上が大半で、高血圧・糖尿病・便秘、腰・膝の関節症など慢性疾患の方々です。午後四時二〇分ごろに診療所を出て船に乗り、五時三〇分ごろに帰宅する。この繰り返しが、いつの間にか一五年ちかくになりました。

台風時など、海が荒れ船が欠航することがあります。自宅に戻れない時には、島のアパートに泊まります。三日間くらい泊まり込んで自炊の生活を送ったことや、雨戸がはずれ格闘したこともありました。戸袋が吹き飛ばされた経験も二度ほどしました。ある年の大晦日、診療所から自宅に電話が入り、三十代の男性が亡くなったとのことでした。その日は海が荒れて定期船は欠航。警察の船に乗り、荒天の中を島へ向かったこともあります。

急に発病し、ほかの病院・医療機関へ搬送することもたびたび起こります。島の親元に帰ってきた方が産気づいて搬送したこと、胸が痛いと診療所に来られて心筋梗塞の疑いでドクターヘリで搬送したことなどさまざまな経験をしました。

これまで、どうにか務めを果たすことができたのは、島の自治会長さんをはじめ、皆様方のご協力の賜物であり、診療を助けてくれた看護師さんたちのお陰であると感謝しております。この一〇月から、神浦の診療所と池島診療所の間でオンライン診療ができるようになりました。これからも島の皆様方の健康保持のために努めて参ります。■

「高島トマト」栽培に取り組んだ試行錯誤の一八年

崎永海運株式会社高島トマト事業部たかしま農園所長
溝江弘

昭和30年生まれ。平成17年崎永海運株式会社入社、トマト事業部に配属。同20年たかしま農園所長就任、現在に至る。「高島トマト」の栽培方法などを試行錯誤しながら研究、極力水分を抑えた土壌に作付けなどを行ない、糖度の高いトマトの生産に成功。併行してメロンやニンニク栽培にも取り組み商品化につなげるなど高島の産業振興に貢献。

高島は長崎市内から高速船で約四〇分、本土と橋で結ばれた隣りの伊王島から約一〇分の距離にある人口二五〇人ほどの小さな島です。この島でのトマト栽培は、炭鉱が閉山になった後の雇用の場として、また、石炭に替わる特産品づくりを目的に、平成元年にスタートしました。当時は第三セクター方式で運営されていました。

市町村合併により高島町が長崎市に編入されると同時に、当時の小泉政権による規制緩和（農業特区）の指定を受け、同一七年八月から崎永海運がこの事業を引き継ぎました。第三セクターの頃は、栽培指導から販売までを企業に委託していましたが、事業継承の際にこれらをすべて解約したため、栽培も販売も一からのスタート。私もトマト栽培の経験はなく、まずはそれらに関する知識の習得から始めました。トマトに関する専門書や辞典を読み、現場で確認する日々で、そこで得た知識をもとに「一年に一つ以上は栽培方法の改善を図ること」を目標に試行錯誤を重ねた結果、糖度の高い品質の良いトマトを安定して生産できるようになりました。

「高島トマト」の栽培の基本は、与える水分を極力抑え、ストレスをかけるもので、スパルタ農法ともいわれています。水分ストレスをかけてつくった高島トマトの平均糖度は、九度以上と一般的なトマトの二倍以上と高く、酸味とコクもあると高評です。また、トマトカレー、トマトジュースも好評を得ており、高島トマトのブランド化が進んでいることを実感できるようになりました。一緒に働く若い職員たちも高島トマトの栽培に携われることに誇りを持って、日々の管理に努めてほしいと考えています。

今回の受賞は一緒に頑張ってくれた職員あってのもの。ともに喜びたいと思います。■

特集 離島振興功労者表彰 ― 長崎県壱岐市壱岐島

子どもたちや若い人々を育てるために

元・壱岐「島の科学」研究会会長
山内（やまうち） 正志（まさし）

昭和35年郷ノ浦町立初山中学校教諭に赴任以降、渡良・武生水・勝本中学校教諭、那賀・武生水中学校教頭、石田・箱崎・立田河中学校長を歴任するなど壱岐の中等教育の第一線として活躍。教職のかたわら同39年壱岐「島の科学」研究会へ入会。会の研究誌「島の科学」に創刊から最終号まで60年にわたり携わる。平成19年同研究会の第4代会長就任。

壱岐島は、玄界灘に浮かぶ周囲およそ一七六キロメートルの島です。古くから、日本列島と朝鮮半島をつなぐ交通の要衝として栄えました。私は中学校で理科教師をしながら、昭和三九年に壱岐「島の科学」研究会（壱岐を人文・社会・自然科学の分野から解明・紹介する団体）が創設されるとすぐに入会しました。会の研究誌「島の科学」の創刊に関わり、第一号から第六〇号（最終号）までの六〇年間にわたり、壱岐に関する論文などを編集して刊行、島の向上・発展に資することを目的に、市内の学校や行政関係者、団体など島内外に広く寄贈してきました。

昭和六〇年一月、勝本町の海岸のおよそ五〇〇万年前の地層からステゴドン象の化石が発見され、全国の研究者や学生、地元の教師が集まり、壱岐島地学総合研究会（のちの地学団体研究会）が結成されました。一三年間に三〇回の地質調査が実施されましたが、私はそのすべてに参加しました。

また、壱岐の植物分類と標本づくりを進めてきました。子どもたちを育てるために、小中学生を対象とした夏休み自然観察、採集同定会を昭和五〇年から平成二〇年まで実施しました。その後は、小中高校の野外学習や研修会、一支国（いきこく）博物館の「壱岐学講座」など各種講座の講師も務めました。

壱岐も過疎化が進み人口減少が続いていますが、離島振興法の多大な恩恵を受けて、住民は頑張っています。壱岐市はいち早く「持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）」の達成に向けて取り組んでいくことを宣言し、「ＳＤＧｓ未来都市」に選定されました。高校生をはじめ市民が一丸となってアイデアを出し合いながら進めています。私は高齢ではありますが、体力・気力が続くかぎり、子どもたちや若い人々を育てるために、これまでの経験を生かしていきたいと思います。■

俺がやらねば誰がやる 誠実に島のために務めた議員生活

元・長崎県五島市議会議長 中尾剛一（なかお ごういち）

昭和45年福江市議会議員当選。同議会航路改善調査研究特別委員会委員長として、五島航路へのジェットフォイル就航の実現に尽力。市町村合併後、五島市議会の初代議長を務めるとともに、五島地域国境離島新法制定期成会会長として有人国境離島法の制定に大きく貢献。平成11年藍綬褒章（地方自治）、同21年旭日小綬章（同）ほか受章多数。

私は、三四歳の時に福江市（現五島市）の議会議員になり、それから三八年間議員生活を続けました。いまは現役を離れて一四年です。これまでのさまざまな仕事のなかで、平成二一年の五島市議会の議長時代に対馬市と壱岐市の両議長に呼びかけ、それぞれの市長も賛同する形で三離島の連合体をつくったのは大きな思い出です。持ち回りで年一回程度会議を開き、島と島との結束を強くして連携を深めることを提案しました。それまでは、島同士のつながりはほとんどありませんでした。

私は、「離島に生まれて〝損〟という観点を捨て、離島でなければできないことを実現したい」と発言しました。また、各島が共通して抱える課題の解決や、国境域の離島の振興を目的とする特別措置法「防人の島新法」の実現に向けて協力していくことを約束しました。その後すぐに議員を辞めてしまい、以降実務に携わってはいませんが、後輩たちがあとを引き継ぎ、私の功績を認めてくれていることに感謝しています。

私は福江島に生を受けてから、島を一週間以上離れたことはありません。議会の研修で東南アジアを訪ねたのが一番長い旅行でしたが、それでも一週間以内です。まったくの島の男で、島のことしか分からない「井の中の蛙、大海を知らず」ですが、誠実に島のためを思ってこれまで務めてきました。私の信念は、「悪いことをしなければ、誰にも負けない」「俺がやらねば誰がやる」です。人より抜きん出たものはありませんが、いまでも島のことを思う気持ちは人一倍あると自負しています。

八七歳になりましたが、後進の頑張りに負けないように、自分のできる地域振興を、正しく、愉快にやっていきたいと思っています。（談）

特集 離島振興功労者表彰 ― 長崎県五島市福江島

バラモン凧の継承が島の活性化につながる

元・長崎県岐宿町議会議員／同五島市議会議員
田端（たばた） 久世（ひさよ）

昭和12年生まれ。同35年岐宿町農業協同組合（現ごとう農業協同組合）に入職。平成3年岐宿町議会議員当選、以後、市町村合併により五島市議会議員までを含め4期13年9カ月にわたり地方自治に貢献。バラモン凧の製作を通じて伝統工芸の承継などに尽力するほか、岐宿町体験交流協議会を設立、会長就任。退任後も会員として民泊の受け入れに努めている。

バラモン凧づくりは、子どもの頃に父や兄から習いました。農協を退職して岐宿町議会議員になった時、つくり方を思い出しながら、二～三年ほどかけて今のバラモン凧の形にしていきました。骨組みの形や、色づけなど、試行錯誤の連続だったことを覚えています。この凧の魅力は、飛ばすとブーンブーンと鳴ることです。重厚感のあるこの音が鳴ってはじめて、凧が揚がったという気持ちになります。

じつは、NHKの連続テレビ小説「舞いあがれ！」のなかでは、私がつくったバラモン凧が使われています。朝ドラに採用されたことで人気が出て、北海道から沖縄まで全国から注文がきていますが、大量生産はできません。これまでの製作数も一九〇〇枚くらいだと思います。

一〇年ほど前に、全国老人クラブ連合会の長崎県大会があり、私は五島市の代表として参加しました。バラモン凧一五枚と四角い凧を二〇枚ていど持参し、それらをキャンバスに、五島市のキャラクターを皆さんに描いていただいたのですが、すごく盛り上がりました。嬉しかった瞬間です。

いまでも年間百枚ぐらいは凧をつくっており、行政のイベントなどに提供して、地域の活性化に役立ててもらっています。福江空港のロビーに二メートルの大凧を飾っていただいているほか、県立五島南高校での体験も行なっています。

現在の悩みは、後継者がいないことです。バラモン凧の伝統を絶やしたくないと思い、公民館の講座などで後継者の育成に努めていますが、受講者の多くは六〇歳以上で、自分や孫たちのためにつくることを目的としています。後を継いでくれる人がなかなか増えない状況ですが、五島の伝統文化であるバラモン凧をつくり続けることが島の活性化につながると信じ、身体の続く限り頑張りたいと思っています。（談）

五島列島の医療向上を島の診療所に勤めた四十年余

医師／五島市伊福貴診療所長 中野文耕

昭和23年生まれ。長崎大学病院、北九州市慈恵曽根病院勤務を経て、同55年玉之浦診療所に着任。以後、若松町国保診療所、五島市伊福貴診療所など40年以上の長期にわたり五島列島の医療提供に尽力。診療や治療以外にも感染症のワクチンの接種など疾病治療・予防など多方面で島の医療向上に貢献。平成21年第37回医療功労賞全国表彰受賞。

この度、国土交通大臣表彰を受賞することとなり驚いています。思い返せば、長崎大学第二外科の関連病院で、下五島の玉之浦町長から電話で「あなたは五島で生まれ育ったのだから、医師不在で困っている町立診療所に是非」と依頼され、三一歳で勤め始めたのが、今日までの四四年間も五島列島の市・町立診療所のみで働くこととなる発端でした。

父が学校教師で、子どもの頃から三年おきに下五島から上五島まで転校を繰り返しました。島の農村生活、小中併設校の複式授業や無医地区の悲哀を経験し、五島の住民・患者さんの生活の様子や仕事ぶりが手に取るように解ることが、信頼関係の構築・維持など今の仕事にも生きています。

玉之浦診療所勤務は二年半ほど。もっとも長く小中学校生活を送った上五島の若松町より「大学病院内科からの若手医師の派遣がなくなり困っている」と説得され、以降、六五歳までの三二年間を若松町国保診療所にお世話になりました。これだけ長居できたのは、学生時代の先輩が心臓血管外科から若手医師を派遣してくれるように配慮してくれたことも幸いしています。若松では時間外診療も連日連夜で、救急車も年間八〇台ほど入りましたが、大学関連病院で救急医療や全身麻酔（三百例ほど）をかじった経験が役立ちました。

小学校八校、中学校三校、幼稚園と保育所六施設の校医を兼務し、診療も多忙だったため六五歳で退職し、長崎市内へ戻ろうとしていた春に、五島市の担当課長と五島医師会事務局長の二人が来島し「五島市伊福貴診療所が医師不在で困窮している」と要請され、椛島に留まることになりました。食堂もない島ですが、かって知ったる一本釣り漁と延縄漁の地ゆえに、また九年半持ちこたえて、七五歳を迎えました、遠からず、清新な後進に道を譲れることを願っております。■

特集 離島振興功労者表彰 ― 熊本県天草市御所浦島

化石や伝馬舟、御所浦の財産を活かした体験学習の島づくり

御所浦アイランドツーリズム推進協議会事務局長 三宅 啓雅

昭和29年生まれ。御所浦町役場に入職後、平成13年に島の有志60人と「御所浦アイランドツーリズム推進協議会」を設立、事務局長に就任。同18年天草市役所を退職し、同協議会専任に。修学旅行生の誘致、木造の櫓漕ぎ船「伝馬船」の復刻など島の振興に尽力。「御所浦伝馬舟の会」「御所浦ジオツーリズムガイドの会」の事務局も務める。

御所浦町には、地球からの贈り物が二つあります。穏やかな八代海に浮かぶ一七の島々と、地球の歴史の一端をのぞくことができる化石です。町では平成九年に「全島博物館構想」を策定し、この財産を柱とした環境教育の充実と、来島者と住民の交流促進を目指していきます。

漁業中心の町に新しい風が吹き始めた頃、私は商工観光の担当でした。体験プログラムを掲載した手作りのパンフレットを持ち、関西の旅行会社に営業したところ好評で、二年後には岐阜から御所浦初の修学旅行生一二〇名を迎えることになりました。当日は、大漁旗や島の中学生による御所浦太鼓の出迎え、住民やメディアの多さに驚いたことを覚えています。この盛り上がりを受け官民共同で「御所浦アイランドツーリズム推進協議会」を設立、旅館と二八軒の民泊を窓口に、以降一〇年間で一万人超を受け入れました。

平成一八年、二市八町の合併で天草市となったことを機に、私は五二歳で退職し同協議会を引き継ぎました。その後、幼少期に釣りなどで遊んでいた五メートルほどの木造の櫓漕ぎ舟・伝馬舟を残そうと、船大工経験のある同級生とともに二八年ぶりに進水式を行ないました。今では五十年以上前の舟を補強した四艘と新造舟四艘の計八艘の伝馬舟で、牧島（御所浦島と架橋）の静かな入り江での櫓漕ぎ体験を提供しています。運営は一〇人の伝馬舟愛好会です。同二〇年、国の「子ども農山漁村交流プロジェクト」のモデル地域に指定され、御所浦は体験学習の島として広く認知されました。

令和六年三月の「恐竜の島博物館」の開館を前に、島の若者たち三六名が「御所浦せんばいなか」という組織を立ち上げるなど新たな動きもみられます。未来の子どもたちに誇れる島づくりに期待し、陰ながら応援していきます。■

若者・バカ者・よそ者が未来を語り合える島を目指して

元・島浦町漁業協同組合参事
結城（ゆうき） 豊廣（とよひろ）

昭和24年生まれ。島浦町漁業協同組合総務部長、参事を歴任。定年退職後、「島野浦いきいき観光協議会」「島の浦ツーリズム」など島の振興を担う団体を立ち上げ代表を務めたほか、「延岡ふるさとツーリズム協議会」の第1号認定を受けて民泊を運営するなど島野浦島の振興に貢献。現在、歴史や文化などの島の魅力をSNSや講演等で発信している。

学生生活を東京で過ごした私は、二二歳で島野浦島（しまのうらしま）に帰郷した。離島振興法と高度成長期によって、港は「イワシの舞う島」と呼ばれるほど活気に満ちていた。島浦町漁協に勤めた私は、オイルショックや公害、二百海里問題など漁業をとりまく環境に不安はあったものの、右肩上がりの水揚高が続く状況に、将来を危惧することなく島暮らしを甘受していた。

ある夜、週刊誌を片手に友人が訪ねて来た。開いたそのページには、近隣の町への石油精製工場誘致の計画が載っていた。幸いにも計画は消滅したが、漁協役員選挙にまで影響を与えた。人事異動があり、早朝からイワシやサバ、夜はカツオのセリの毎日。そんな折、「第二三回離島青年会議」への出席を上司に告げられた。当時の組合長には、感謝しかない。

同会議のために提出した作文には「島野浦島は生産力があるが若者の生きづらい島です」と書いた。五日間の研修や会議、交流会で聞いた各地の状況は、その後の私の活動に影響を与えている。特に研修最終日に「継続は偉大なり」と声をかけてくれた事務局職員の言葉はなによりも励みとなった。

同会議修了者として全離島会長から「離島振興青年推進員」の委嘱を受けた日から四四年の月日が流れ、私は、逼迫した漁業者の債務処理を最後に定年を迎えた。この間、ライフラインの整備は進んだはずなのに島は高齢化している。

退職後、私は「島野浦いきいき観光協議会」を立ち上げ、交流人口の増加を図った。現在は、若者・バカ者・よそ者による地域づくりに取り組んでおり、代々続く干物屋や網元の後継ぎ、ブランド魚を育てる二人の三代目たちなどが、飲食店のなかった島に一五年ぶりに開業した「満月食堂」に集い、未来を語っている。地域おこし協力隊のサポートを受けながら、彼らとともに今春のＮＰＯの設立を目指している。■

特集 離島振興功労者表彰 ― 鹿児島県西之表市種子島

時代に取り残されぬ充実した離島医療を

医師／せいざん病院理事長
田上容正（たのうえやすまさ）

昭和44年種子島唯一の総合病院「種子島医療センター」の前身となる「田上容正内科」を開院。24時間対応の救急患者の受け入れ体制の整備、新たな診療科目を設立のほか、平成3年介護老人保健施設「わらび苑」、同9年訪問看護ステーション「野の花」を開設するなど、医療・介護の両面で島の振興の一翼を担う。同24年秋の叙勲（旭日双光章）受章。

種子島（たねがしま）は鉄砲伝来とロケットの島として、隣の屋久島は世界自然遺産の島として有名で、多くの観光客が訪れています。この二つの島を併せて「熊毛（くまげ）医療圏」と位置づけられており、両島には一つしか精神科病院がありません。これを「せいざん病院」といい、私はここで医療に従事しています。本来は内科医ですが、令和五年八月に米寿を迎えてからも、入院患者の内科的疾患を中心に診療を行なっています。入院患者の担当は数名です。

私が生まれ故郷の種子島に戻り、昭和四四年に「田上容正内科」を開院してから五四年が過ぎました。最初の一～二年は、白衣のままベッドに横たわるような状態。手に負えない患者は、船や飛行機で鹿児島の病院などへ搬送しました。

開業から一〇年が過ぎて、鹿児島大学病院より医師の派遣が得られるようになり、外科・整形・小児科の診療もできるようになりました。この頃から人工透析を開始、その後、眼科の手術も行なえるようになり、ある程度の救急医療にも対応できるようになりました。三〇年を経た頃には、島内唯一の精神科病院が後継者の問題で廃院の危機に晒されましたが、どうにか継続ができ、もう二〇年になろうかとしています。

種子島も時代の流れに抗えず、少子高齢化となっております。医師・看護師などの人材不足に悩まされながらも、日夜離島での医療に従事していますが、これが私に課せられた「使命」であると、最近つくづくと感じているところです。

日本には驚くほど離島が多く、どの島でも種子島と同じように苦労を重ねながら医療に従事しておられる方がいるのだと思います。今後、わが国の離島医療が「何時（いつ）でも、何処（どこ）でも、誰もが医療を受けられる」ような充実したものになることを切に願っています。■

島の自然を千年先の未来へつなぐ

農家／エコツアーガイド／特定非営利活動法人徳之島虹の会理事長
政武文（つかさたけふみ）

昭和27年生まれ。平成20年の帰島後、タンカンやジャガイモをはじめとする農業に従事。同26年よりエコツアーガイドとして活躍。これらと併せて徳之島の環境保全活動にも尽力。令和2年より特定非営利活動法人徳之島虹の会理事長就任、現在に至る。徳之島エコツアーガイド連絡協議会会長、環境省自然公園指導員、林野庁森林保全巡視員。

徳之島は、二〇二一年七月に奄美大島および沖縄島北部、西表島（おもてじま）の島々とともに生物多様性が評価され世界自然遺産に登録された。しかし、ここがゴールではない。島の自然が人類共通の宝として認められたと同時に、普遍的価値を持つ自然を未来につないでいくことを約束したのである。

徳之島の遺産登録エリアは四地域の中で一番小さい。また、住民居住区と遺産エリアが隣接しており、人々の暮らし方いかんでは自然に悪影響をおよぼしかねない。加えて、観光客が自然エリアに集中することによる負荷も懸念される。私は、特定非営利活動（ＮＰＯ）法人徳之島虹の会の一員として、青少年健全育成、伝統文化継承、自然保護など多岐にわたる活動に取り組んでいる。

一方、島の自然を活用してエコツアーガイド業などの経済活動も行なっている。エコツアーでは、持続可能な活動となるよう保全と活用のバランスを心掛けている。また、自然エリアに観光客が集中しないよう、集落歩きや伝統文化体験、農業体験などのさまざまなツアー商品を提供している。

徳之島は農業の島で、私も本業は農家だ。生産物を世界自然遺産の地で獲れた「ブランド農産品」としてＰＲし、農家にも遺産登録による経済波及効果がおよぶよう苦心している。

全国の離島の持つ共通の課題は、若者の流出であろう。ほとんどの若者は、進学や就職のため島を離れる。私は、今後増えるであろう観光客を案内するエコツアーガイド業が職業選択の一つに成り得るのでは、との思いでガイド業の確立に向けて取り組んでいる。ＮＰＯについても、活動資金の調達難という課題はあるが、世界の宝となった徳之島の自然を千年先の未来へつなぐ、という熱い志しを持って精力的に活動していきたい。■

特集 離島振興功労者表彰―北海道礼文町礼文島

礼文島の医療向上に尽力

医師／礼文町国民健康保険船泊診療所
升田鉄三

昭和二九年生まれ。同六一年一月、礼文町国民健康保険船泊診療所に赴任後、同診療所副所長、所長を歴任。令和三年四月、所長を子息に譲り退任、その後は医師として同診療所に勤務されるなど、三七年にわたり礼文町住民への医療の提供・向上に尽力。船泊診療所着任当初、病床数一九床と限られた設備環境のなかで、あらゆる病気やケガに対応。その後、地域の患者が島外へ通院して検査や治療を行なう負担の軽減に向け、医療機器の充実を図るなど礼文島の医療環境の改善に貢献。特に平成一四年の新しい診療所の開業にあたっては、所長として高速ＣＴやＭＲＩの設置を進め、従来よりも正確かつ迅速な診断を実現。加えて、地域医療センター病院である稚内市立病院との連携に努め、それまで医師の不足により治療が課題となっていた精神科などの遠隔診療の環境を整備。令和四年三月の退職後も船泊診療所の嘱託医として、継続して住民に寄り添った献身的な医療を提供。平成九年北海道国保連合会長表彰、同一五年北海道医療功労賞、同二五北海道社会貢献賞、同二八年優良職員勤続三〇年表彰（礼文町）、令和三年日本医師会赤ひげ大賞ほか受賞多数。

国土交通大臣表彰の表彰状授与の模様。